

発掘調査の概要

甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第151次）

昨年11月から続いた甘樫丘東麓遺跡の調査は、4月末に埋め戻しを終了しました。今回の調査では新たに3棟の建物を確認するとともに、これまで見つかった建物も含めて年代を明らかにすることができました。

建物群は大きく2時期に区分できます。古い建物群は3棟あり、7世紀の中頃までに取り壊されることが明らかになりました。年代の手がかりとなったのは、調査区の北東隅で見つけた長さ4mほどの土坑（ゴミ捨て穴）です。この土坑は昨年の調査で確認した掘立柱建物の柱穴を壊しています。土坑からは7世紀中頃の土器がまとまって出土したため、まさに大化の改新の頃に建物が廃絶していることが判明しました。発掘調査で掘立柱建物の廃絶年代を明らかにすることは至難の業ですから、極めて幸運なケースといえるでしょう。

これまで、甘樫丘東麓遺跡は『日本書紀』に記された蘇我氏の邸宅ではないかと推測されてきました。今回の調査成果によって、その可能性は高まったといえます。しかし、建物群を蘇我氏の邸宅の一部と断定するには早すぎます。今回見つかった建物の内容を見ると、倉庫らしき総柱建物が2棟と小規模な掘立柱建物が1棟です。蘇我氏の邸宅ならば、屋根に庇がつくような大型建物が存在するはずですが、ま

だ谷の敷地6,000㎡のうち2,000㎡を調査したに過ぎませんから、残りの部分に大型建物があるのではないかと期待しています。

また、7世紀中頃に一旦は建物群が廃絶した後、さらに敷地を造成して新たな掘立柱建物を建てています。これらの建物は3棟あり、周囲に掘立柱塀を巡らせています。7世紀後半には谷を仕切って計画的に土地利用をおこなった様子が明らかになりました。7世紀後半の建物群は、誰がどのような目的で利用したものなのか。新たな検討課題が生じました。

3月29日には現地見学会を実施し、2,000名を超える方々が見学に訪れました。秋にはさらに調査を進める予定です。ご期待ください。

（都城発掘調査部 豊島直博）



現地見学会の様子



土坑の掘り下げ



第151次調査区全景（南西から）